

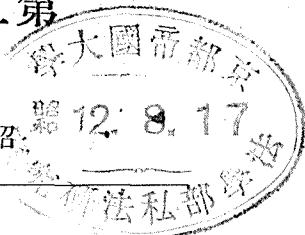
(大正五年四月六日第三種郵便物認可)昭和十二年七月廿五日印刷納本(毎月一回一日發行)

哲 學 研 究

第 二 十 二 卷 第 八 册

第 二 百 五 十 七 號

昭 和 二 十 年 八 月 一 日 發 行



美の深さ(承前)……………文學博士 植田壽藏

原始インド・アールヤ人の思潮とアタル
ヴァ・ヴェーダ……………文學士 岩本裕

カントの先天總合判斷の最高原則につい
て(承前)……………文學士 大西友太

量子論の諸問題……………理學士 湯川秀樹

原子論に於ける因果律……………
理學士 武谷三男譯

ニールス・ボーア

京 都 帝 國 大 學 文 學 部 內 部

京 都 哲 學 會

京都哲學會規則

- 第一條 本會ヲ京都哲學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ廣義ニ於ケル哲學ノ研究及其普及ヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ
- 一、毎月一回研究会ヲ開ク
 - 一、毎年公開講演會ヲ開ク
 - 一、毎月一回哲學研究ヲ發行ス
- 第四條 本會事務所ヲ京都帝國大學文學部内ニ置ク
- 第五條 本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク
- 一、委員(若干名)京都帝國大學文學部哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ
 - 一、書記(一名)委員會ニ於テ囑託ス
- 第六條 本會ノ趣旨ニ賛同スル者ハ何人ニテモ會員タルコトヲ得
學校、圖書館、教育會、其他ノ團體ハ其團體ノ名ヲ以テ入會ス
ルコトヲ得
- 第七條 會員ハ會費トシテ年四圓四拾錢、前後二期ニ分チテ前納
スベキモノトス
- 第八條 會員ハ本會ノ諸種ノ會合ニ出席スルコトヲ得、且ツ雜誌
『哲學研究』ノ配付ヲ受ク
- 第九條 本會規則ノ改正變更ハ委員會ノ決議ニ依ル

京都哲學會役員

委員

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	
天野	岩井	植田	白井	小島	木村	九鬼	田邊	中井	西谷	野上	羽溪	波多	服部	久松	本田	山内	山内	山内	山内	山内	山内
貞祐	勝二	壽藏	二尚	祐馬	素衛	周造	正一	正一	啓治	俊夫	了諦	精一	英次	眞一郎	義英	得立	得立	得立	得立	得立	得立

前 號 目 次

マクス・シェーラーの政策論と政治論……………文學士 田 中 熙

アリストテレスに於ける認識論的思想の發展 (承前)……………商學士 藤 井 義 夫

自然數論の無矛盾性證明 (承前)……………文學士 近 藤 洋 逸

—— G・ゲンツェンの業績 ——

會 告

- 一、本會へ入會希望者ハ京都市西洞院七條南内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ規定ノ會費(前表紙裏ニアリ)御納付ノ上御申込被下度候
- 一、會員ニシテ轉居入退會等(編輯事務以外ノ一切)ノ事務ハ内外出版印刷株式會社内京都哲學會へ御通知被下度候
- 一、會費ハ振替口座大阪三〇六六三番 内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ御拂込被下度候
- 一、前金切レノ場合ハ帶封ニ「前金切」ノ印章捺捺致スベキニ付直ニ御拂込下サレ度候
- 一、本誌ノ編輯ニ關スル通信及紹介・新刊書寄贈雜誌等ハ凡テ本會宛テニ御發送被下度候

京都帝國大學
文學部内
京都哲學會

註 文 規 定

- ◆ 會員にあらざる購讀者の御註文及び廣告に關する件は内外出版印刷株式會社へ御申込下され度候
- ◆ 本誌の御註文はすべて代金郵税共前金にて御送り下され度候
- ◆ 振替貯金にて御送金の際は(振替京都三九三一番大阪三九三一番東京三九三一番 内外出版印刷株式會社宛に願上候
- ◆ 特に請求書及領收書等を要する場合ハ郵券參錢御送付下され度候

定 價

冊	冊	冊	冊	冊	冊
一	六	十	十二	十二	十二
冊	冊	冊	冊	冊	冊
金	金	金	金	金	金
貳	貳	貳	貳	貳	貳
拾	拾	拾	拾	拾	拾
錢	錢	錢	錢	錢	錢
壹	壹	壹	壹	壹	壹
錢	錢	錢	錢	錢	錢
受	受	受	受	受	受
稅	稅	稅	稅	稅	稅

廣 告 料

一頁 金參拾圓 半頁ハ取扱不申

昭和十二年七月廿五日印刷納本
昭和十二年八月一日發行 第二百五十七號 第二十二卷

京都帝國大學文學部内

不許複製
轉載

編輯者 京都哲學會
右代表者 須磨勸兵衛
發行者 須磨勸兵衛
印刷者 須磨勸兵衛
印刷所 須磨勸兵衛

發 行 所

京都市下京區西洞院七條南

内外出版印刷株式會社

振替口座 京都三九三一番
大阪三九三一番
東京三九三一番

本社 京都市下京區西洞院通七條南入 内外出版印刷株式會社

賣捌所 (東京) 寶文館 東海堂
(大阪) 北隆館 盛文館
(神戸) 寶文館 川瀨書店
(京都) 大寶文館 大盛社
參文社

京大教授 植田壽藏 著 (再版)
文學博士

藝術史の課題

本書は、俊逸を以て鳴る京都學派の一重鎮として、顯赫せる美學的考察と豊富なる藝術史的造詣とを一身に兼ね、その偉容學界比なしと稱せられる博士が十年勞作の成果である。藝術史の研究に志す人は藝術史の本質を知らねばならない。これを知らんとする人は先づ藝術の本質を知らねばならない。徒らに舵なき船を動かさんとするの嫌ひを避けんとする人、將又苟も藝術に関心する人は、本書に於て實に藝術・藝術史の根本問題の透徹せる解答を見出すであらう。いかに此等が流俗の見を超越する深微なる意義と鮮新なる觀點とを有するかを知るであらう。論述の緻密にも拘らず解説の平明ならんことに博士は特に留意せられたが清潤にして高雅なる博士の人格は自からその文章に反映し本書の精讀を勧めむべき所以を更に加へてゐる。

價 二・〇〇 送 三二 菊クロス天金 三三〇頁

(大正五年四月六日)昭和十二年七月廿五日印刷納本(毎月一回)第三種郵便物認可(昭和十二年八月一日發行)

—新刊—
ウィルヘルム・トムセン・言語學史

京大助教授 泉井久之助 高谷信一 共譯

言語の學に興味ある程の人は、小國丁抹が言語學史上に残し、また現に印しつゝある巨大なる足跡を知つてゐるに違ひない。今日の實證に據る言語學は、學統としては普通に獨逸のホップに出づるとせられるものの、事實上それが方法論的に確立せられたのは、丁抹のラスムス・ラスクに依つてであつた。言語學における近代精神は先づ丁抹に於いて最も純粹明晰あらはれたといふことが出来る。我國には専らその鄂爾渾の突厥碑文の解讀によつて一般に知られるトムセンは、コーベンハーゲンに於けるラスクの後繼者であり、その師は嚴正博大なラテン語學者マズグワイ、相競ふものは有名なヴェルネル、その門下に英語學のイエスベルセン、印歐比較言語學のパーセルセン、ロマン語學者のニユーロッパ、偉大なスカンディナヴィストのウィンメル。トムセンを中心とするこの環境に我々は注意しなければならぬ。

トムセンの「言語學史」は今日既に言語學における一個の古典といふ事が出来る。フランスのメイエは本書について云つてゐる。「著者の特質たる視野の廣大と精確によつてなれる叙述」と。我々は本書を、その決定版と見做すことが出来る全集版から、原語に従つて譯出した。

價 一・五〇 送 二四 四六クロス 二〇〇頁

哲學研究 第二百五十七號 定價金四拾錢 郵便金壹錢

東京市寺町丸太町 替振 都京 三一五二番
東京市神田駿臺 替振 東京 三五九〇番

弘文堂

